

「卓越大学院プログラム」中間評価結果

機関名	京都大学	整理番号	1811
プログラム名称	先端光・電子デバイス創成学		
プログラム責任者	杉野目 道紀	プログラムコーディネーター	木本 恒暢

(評価決定後公表)

<p>(総括評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> S:計画を超えた取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を十分に達成することが期待できる。 <input checked="" type="checkbox"/> A:計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。 <input type="checkbox"/> B:一部で計画と同等又はそれ以上の取組も見られるものの、計画をやや下回る取組もあり、本事業の目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要である。 <input type="checkbox"/> C:取組に遅れが見られ、一部で十分な成果を得られる見込みがない等、本事業の目的を達成するために当初計画の縮小等の見直しを行う必要がある。見直し後の計画に応じて補助金額の減額が妥当と判断される。 <input type="checkbox"/> D:取組に遅れが見られ、総じて計画を下回る取組であり、支援を打ち切ることが必要である。 <p>[コメント]</p> <p>大学院全体の改革を実現する卓越した学位プログラムの確立については、高度学際戦略・社会適応戦略・国際教育戦略の3つの柱を中心に大学院教育支援機構を令和3年度に設置して全学的な大学院改革を推進している点が評価できる。</p> <p>修了者の高度な「知のプロフェッショナル」としての成長及び活躍の実現性については、研究室ローテーションや国際セミナー道場、複数教員指導制など多様な育成の制度やプログラムが提供され、その多くが必修にされている。専門分野の業績や成果はKPIを越えており評価できる。また、e-卓越カフェ等で学生の自主的な企画運営も活発になされている。しかし、本プログラムがデバイスに関する領域に限定されすぎている傾向があるため、デバイスを取り巻く社会的な課題解決に関する観点での育成を充実されることが期待される。</p> <p>高度な「知のプロフェッショナル」を養成する指導体制の整備については、学外機関との連携や複数教員指導制度、研究室ローテーション等の制度等が整備されており、連携機関の担当者も積極的にプログラムに参加しており評価できる。これら施策の趣旨を更に学生に伝える改善が望まれる。</p> <p>優秀な学生の獲得については、ホームページ、パンフレット、プログラムの説明会、サマーキャンプ、高大接続事業、国際セミナー道場などにおける本プログラムの紹介や博士号の魅力のアピールなど人材獲得活動の努力が見られる。しかし、本プログラムへの応募学生数が伸び悩んでおり、一層の工夫が期待される。</p> <p>世界に通用する確かな質保証システムについては、三段階にわたる進捗報告会、フィールドプラクティスを経た上での予備審査、さらには海外研究者も審査に加わる形でのグローバルな最終審査会により質保証を行っている点は評価できる。</p>

事業の継続・発展については、外部資金の活用や、「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェロシップ事業創設事業」、「次世代研究者挑戦的研究プログラム」等を獲得し、また卓越大学院基金の創設（3件の寄付実績）や研究科の RA 制度の活用など、整備充実を図っている点は評価できる。